OISO MUNICIPAL MUSEUM

Report リポート

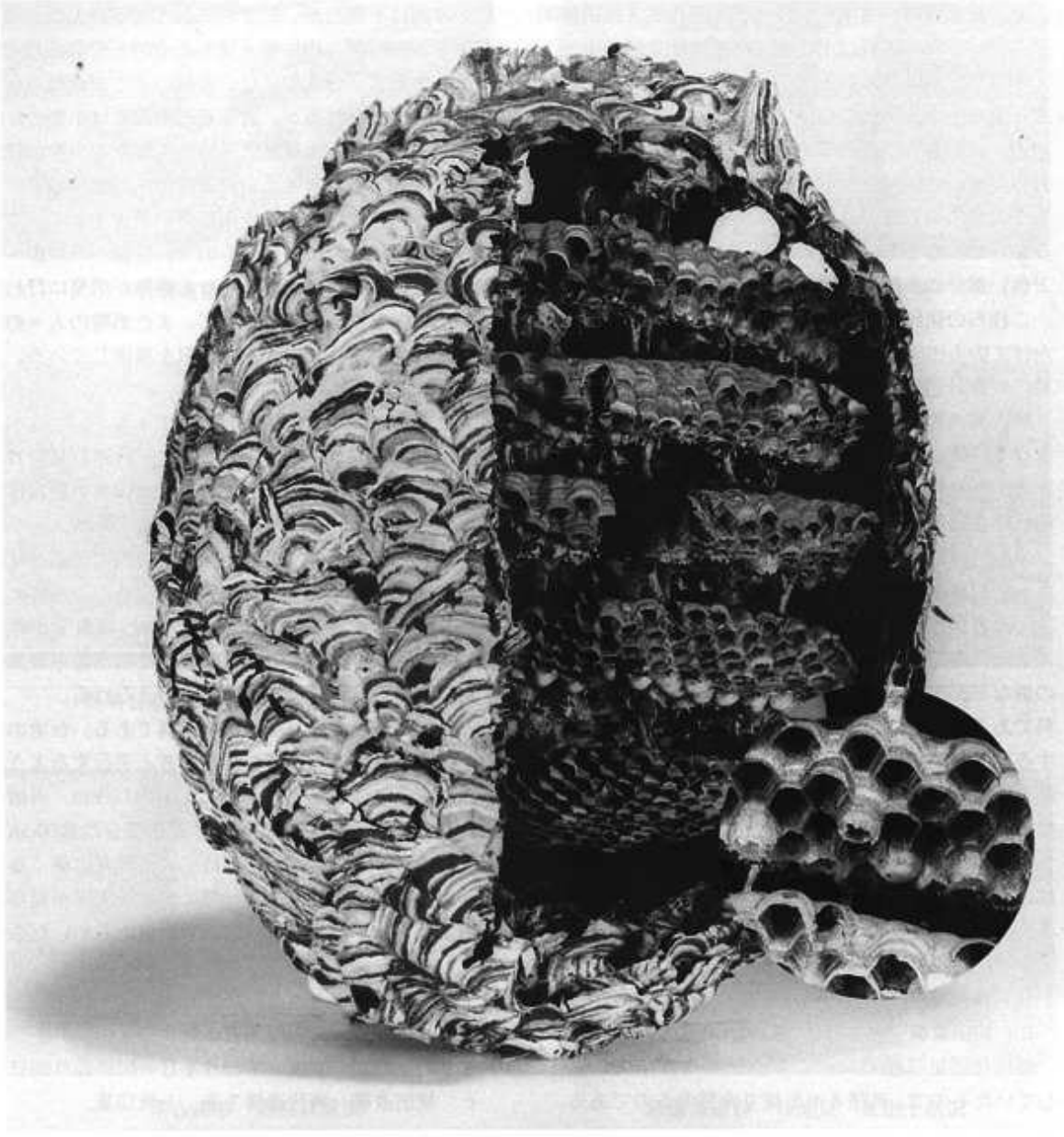
大磯町郷土資料館だより

1994・3・31

9

もくじ

◇最近における発掘調査の成果 2
◇博物館実習レポート 4
◇企画展「山本瑛幾遺作展」 6
◇公共建築賞関東地区優秀賞受賞／海と山と人と① 7
◇トピックス／資料の受入／行事案内 8



最近における発掘調査の成果

大磯町には現在、約170ケ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されている。これらの中には、横穴墓群のように肉眼でも確認できるものもあるが、大半は土中に埋没しており、各種の開発行為に伴う発掘調査により初めて私たちの前に顔を出すものである。平成５年１月から同６年１月まで、大磯町内では13ケ所の発掘調査が実施されている。ここではそれらの中から貴重な情報を提供してくれた遺跡を紹介したいと思う。

１．竹縄遺跡

a　所 在 地　大磯町大磯２，１１５

b　調査期間　平成５年１月10日～同年２月23日

c　検出遺構　古墳～奈良・平安時代竪穴住居址20軒以上、掘立柱建物址３棟以上

本遺跡は遺跡台帳の上では坊地遺跡に包括され、弥生～奈良・平安時代にかけての遺跡として登録されている。発掘調査は高台部分とそれより一段低い部分を行ったが、立地の上から古代人が好んで生活したであろうはずの高台部分には痕跡すら発見することができなかった。そして、現代人の常識では考えられないほど低い部分に多数の住居址が発見されたのである。

これらの住居址は時期的には６世紀末から７世紀にかけてのもので、大磯町の山腹に数多く見られる横穴墓の被葬者達の一集落と考えられる。

横穴墓の数に比べ、こうした被葬者集落の発見例は少なく、横穴墓に近い谷の出口付近に集落が存在すると考えられていたが、本例が示すようにかなり標高が低い部分にも集落を営むことが判明したわけである。

すなわち、現在遺跡地図で示されている範囲外、私たちの想像を遙かに超えた部分に古代人の遺跡が眠っている可能性が高く感じられるのである。

また、本遺跡からはホオジロザメの脊椎とアオザメの歯などが出土している。食生活を知る上で貴重な資料であると同時に、危険を冒して外海に出かけて捕獲するには何らかの理由があるはずである。ロマンにみちた想像をすれば「フカヒレ」として中央官庁に貢ぎ物としていたのかも知れない。

なお、第二次大戦における平塚大空襲の際、落とされたと考えられる焼夷弾が何点か見られた。

２．馬場台遺跡（28地点）

a　所 在 地　大磯町生沢２２１

b　調査期間　平成５年３月９日～同年４月25日

c　検出遺構　弥生時代中期竪穴住居址１軒

竪穴住居址は僅か40m²の調査区のほぼ中央に存在していたもので、直径８ｍを超す大型のものである。しかも、焼失しており、それが原因で廃絶された住居と考えられる。主柱穴は４本（３本検出）と思われ、中心からやや北寄りに炉があり、南側には貯蔵穴が確認されている。焼失した木材は完全に炭化しており、床面に放射状に見られたが、やや北寄りに集中して見られた。このことから、住居が全体的に北側に倒れたものと推測できる。また、完形に近い土器も存在していることや炭化した米が纏まって出土したことなどからこの住居の住人は着のみ着の儘逃げ出したものと思われる。

内部からの出火もしくは外部からの貰火なのか、焼失の原因は不明だが、いずれにしても相当火のまわりが速く、短時間の内に燃え落ちたものと想像される。

弥生中期宮ノ台式期には、本例のような大型の住居がしばしば見られるが、普通その周囲には小型の住居が存在するので、本遺跡においてもまだ相当数の住居が眠っているものと考えられる。

なお、住居址内からは鹿角製釣針が出土している。これは直接漁撈に結び付くもので、狩猟から採集へと移行した弥生時代においてもなお漁撈が活発に行われていたことを物語る資料として、また当時の人々の生活の一端を知るうえで貴重な情報を提供している。

３．南台遺跡

a　所 在 地　大磯町国府新宿１４４

b　調査期間　平成５年11月９日～同年11月27日

c　検出遺構　土坑18基、溝状遺構10条、竪穴住居址１軒、道路状遺構１ケ所

土坑（円形もしくは楕円形の穴）の内の何基かは等間隔に並んでおり、掘立柱建物址になるものと考えられる。今回の発掘調査では竪穴住居址は1軒しか検出できなかったが、葛川を望む高台には相当数の奈良～平安時代の集落が営まれたものと考えられる。

ここでの貴重な発見は道路状遺構である。台地の傾斜と直交するように、また現在の道と平行するように東西に走ると考えられるもので、幅約120cm、両側に幅約30cmの側溝がある。結局、道路部分は幅60cmほどを測るが、よく踏み固められていて非常に硬くなっている。断面の観察では、一部に宝永火山灰が見られるので、少なくともそれ以前までは機能していたものと考えられる。

４．祇園塚遺跡（Ｇ地点）

a　所 在 地　大磯町国府本郷８６３

b　調査期間　平成５年12月４日～同年12月26日

c　検出遺構　溝状遺構７条、土坑15基

字吹切に存在する遺跡で、唯一瓦が採集できる遺跡として古くから知られていた。実際に出土した瓦は1点だけであり、真向かいに位置する祇園塚遺跡D地点でも4点ほど出土したに過ぎない。結局、採集された資料のほうが圧倒的に多いわけである。瓦は松田町にある「からさわ瓦窯」で焼かれたものが含まれている。

この「からさわ瓦窯」の瓦は主に小田原市千代廃寺に供給されたものであり、年代的には8世紀前半の短期操業であったことが知られている。

つまり、吹切付近には8世紀に瓦を用いた建物址が存在していたことになる。当時、瓦を使用した建物は国府や郡衙、有力者の私寺など極限られていたものと考えられ、この点からも出土した瓦の重要性が窺えるわけである。今後は、余綾郡衙もしくは私寺の両面か追及していきたい。

以上雑把ではあるが、近年の発掘調査の成果を記した。こうした大磯町の知られていない歴史の1ページを紐解くことができたのも、偏に土地所有者並びに開発業者の方々のご理解・ご支援の賜物と厚くお礼申し上げたい。　　（当館　鈴木　一男）

竹縄遺跡　調査区全景

竹縄遺跡　焼夷弾出土状況

馬場台遺跡28地点　炭化材出土状況

馬場台遺跡　28地点　遺物出土状況

南台遺跡　道路状遺構

祇園塚遺跡　G地点　瓦出土状況

博物館実習レポート

当館では、平成２年度以降、毎年、博物館実習生を受け入れています。実習生の人数は、例年、10名弱といったものですが、本年度は、５大学から18人（うち建築学科11名）という大人数を受け入れ、９月７日から９月18日、延べ10日間（建築学科の学生は９月７日から９月11日の延べ５日間）の博物館実習を行いました。今回の受け入れで特徴的だったのは、東海大学建築学科の学芸員課程一期生を受け入れたことでした。全国的に見ても非常に珍しい建築学科の学芸員課程、当館学芸員の我々も実習生に対してどのようなカリキュラムを設けて、何を学んでいってもらうのが最良か非常に悩みましたが、専門を活かして民俗、歴史資料の実測を中心に行ってもらっては、という声に始めの２日間を他の学科の実習生と同様のカリキュラムで残りを実測中心で行ってもらうこととなりました。カリキュラムの内容については、以下に示しますが、実習後、提出されたレポートを読んでみると、他の学科の学生と同様のカリキュラムを行いたかったという声が多く、来年度以降再度、カリキュラムの検討が必要なようです。

今回の博物館実習生の人数は例年の約２倍の18人ということになったわけですが、決して大きい博物館とは言えない当館で、実習生がみな十分な実習ができたとは必ずしもいえないかもしれません。しかし、10日間の実習を経て、実際の博物館学芸員の現状を肌で感じることができたと思います。実習で得たことを何らかのかたちで今後の生活に活かしていただければ幸いに思います。

以下に挙げる実習の感想は、実習後、提出されたレポートを抜粋したものです。

東海大学文学部文明学科　朝見　由理

学芸員の仕事は、下準備に多くの時間と労力とが費やされるのだと感じた。まず、私達の展示スペースの一角に展示してあるワラゾウリ（来観者に履いてもらう）を作るにも、前日の雨の中ワラをしごくことから始まった。初めての体験で戸惑ったのでもあるが、数足編むのにまる一日かかってしまった。３日目資料の受け取りも、古い倉だったので、ほこりやクモの巣などで頭から足まで汚れてしまったし、人数が多かったにもかかわらず、大型の資料は運び出すのに苦労した。また、受け取ってきた資料を１つ１つ確かめて塵を落とし、特に書物類は、１ページごとにハケで塵を払って、出版関連を調べるのは、時間と神経を使う作業だった。さらに、品名を調べて札をつけて、数種類の台帳に記録しなければならない。小人数では、とても大変な作業であると感じた。粘土ねりの作業も、慣れないので、土や砂と粘土が、まるで油と水のように感じるほど難しく、体力を必要とする作業であった。５日目の土器焼きも１日がかりで、残暑と火の熱で皆汗びっしょりだった。その後は、割れてしまった土器の修正で、石こうはすぐに固まってしまうし、とても細かい作業で難しかった。最後に実習生による展示を行ったが、４日間があっという間だった。構想は比較的スムーズに決まったが、その後、展示品選び、製作物づくり、展示方法など７人それぞれのイメージがあって、なか

平成５年度博物館実習日程表

	人文系学科の学生の日程		建築学科の学生の日程	
月　日	午　前	午　後	午　前	午　後
９月７日(火)	博物館活動の概要(講義)	町内文化財見学(史跡めぐり)	博物館活動の概要(講義)	町内文化財見学(史跡めぐり)
９月８日(水)	実技実習Ⅰ(ワラゾウリづくり)	実技実習Ⅰ(ワラゾウリづくり)	実技実習Ⅰ(ワラゾウリづくり)	実技実習Ⅱ(民俗・歴史資料実測)
９月９日(木)	考古系・民俗系実習Ⅰ(梱包)	考古系・民俗系実習Ⅱ(寄贈資料受け取り)	実技実習Ⅱ(民俗・歴史資料実測)	実技実習Ⅱ(民俗・歴史資料実測)
９月10日(金)	考古系・民俗系実習Ⅲ(寄贈資料の整理)	考古系・民俗系実習Ⅳ(寄贈資料の整理)	実技実習Ⅱ(民俗・歴史資料実測)	実技実習Ⅱ(民俗・歴史資料実測)
９月11日(土)	実技実習Ⅱ(土器焼き)	実技実習Ⅱ(土器焼き)	実技実習Ⅲ(土器焼き)	実技実習Ⅲ(土器焼き)
９月12日(日)	自然系実習(自然観察会)	自然系実習(自然観察会)		
９月13日(月)	── 休 館 日 ──	── 休 館 日 ──		
９月14日(火)	展示替実習Ⅰ(テーマ設定)	展示替実習Ⅱ(展示構成)		
９月15日(水)	── 休 館 日 ──	── 休 館 日 ──		
９月16日(木)	展示替実習Ⅲ(準備作業)	展示替実習Ⅲ(準備作業)		
９月17日(金)	展示替実習Ⅳ(準備作業)	展示替実習Ⅳ(準備作業)		
９月18日(土)	展示替実習Ⅴ(展示作業)	展示替実習Ⅴ(展示作業)		

※　建築学科の学生の日程で９月８日の午後から９月10日午後までの実技実習Ⅱについては、実習生をいくつかの班に分けてハコブネ、祭り船、鉄板、防空壕の実測を行ってもらった。

なか意見がまとまらなかったし、時間がかかった。

学芸員の仕事のうちで、人々の目に触れるところはほんの一部であって、そこに至るまでの作業が大部分であり、全く表に現れない場合も多いが、時代を大切に守り、受け継いでいく仕事であると実感した。展示に関しては、品やスペースを活かすのもだめにするのも学芸員の働きしだいであり、来館者に精神的付加価値を与えられるかどうかの責任ある仕事であると感じた。また、来館者との明るい接触に感動し、魅力的な仕事と思った。

和光大学人文学部芸術学科　渡辺　納古

大学の講義で、学芸員は研究者である、と教えられた。今回の実習で体験した事の一部だろうから館内での学芸員の仕事は少しはわかったけれど、学芸員の方々がどういう研究をなさっているのか、資料館の展示とどう関係しているのか知りたかった。土器教室や自然観察会は、一般の人々に直接体験してもらうという事で展示と同じくらい重要だと思うが、それを受ける側と催す側と両方みられたのはおもしろかった。人数が少ないと、あのような会を度々開くのは大変だろう。博物館というものが一般の人に対してひらかれた勉強の場であるから、そこにいる学芸員はただ研究者であるだけではなく、運営者にもならなくてはならないのだろう。

今回の実習で最も大変だったのは「展示」だった。私は、展示するにはテーマを決め、テーマについて勉強し、資料を集め、というものだと思っていたが、私達の展示は違った。あれだけの時間でもそれは可能だったかも知れないが、人数的な意見の対立と私達たちのものの知らなさということがあって、実際には展示したい資料があって、それに沿ってテーマをたて、展示方法を考えるということになった。私自身としてはあの展示に多くの疑問が残る。昭和初期の子供の様子や遊びの内容、節句の意味、人々とどれだけの関わりあいがあったのか、五月人形は殆どの家庭でもっていたのかなど知らないことだらけだし資料の年代だってあやしい。展示方法はディスプレイのように美しくうまくいったと思うが。展示によっては短期間で準備するものもあると聞いたし、展示の作り方も様々な方法があるのかもしれないけれど、それでもちゃんとテーマについては勉強するでしょう。実習生の間でもそれはあまり問題にならず、時間内にできるか、きれいに展示できるか、ということの方が問題だった。後からでもいいから私達の展示（企画の段階から）について学芸員の方の話が聞ければよかったと思う。

実技実習Ⅰ（ワラゾウリづくり）の様子

でも全体を通して実習期間は楽しかった。特に私は大学での専攻が芸術なので、講義も美術館をとっているのだが、私は民俗の方に興味があるので資料館での実習はよかったと思う。また自分の生まれ育った町なので親しみやすかった。

東海大学工学部建築学科　大和田　浩子

建築学科を受け入れるのは初めてということでいろいろと考えていただき、実習生は実習生で経験者もおらずどの様なものかよくわからない部分もあるまま実習に臨んだ。五日間は短く感じられたが大変充実したものだったと思う。

作業は実に半分が民俗資料実測（祭り船）であり、その他ワラゾウリ作り（半日）と土器焼き（一日）、あとは町内文化財見学であった。そのほか学芸員が毎日行う作業として照明の点検、取り替え、閉館の知らせ等をさせていただいた。作業の数は少なくともそれは学芸員の方々が普段から行っていることのほんの一部をやらせてもらえたのであり、長い時間の中で時間をかけて一つ一つ作業を終えていくという学芸員の仕事のやり方の一部を勉強させてもらったと考えることもできるだろう。

実習を終えて感じたことの一つに展示空間の作り方の難しさがある。展示を企画したり展示物を調査研究してきた人間には展示物に対してそれなりの想いがあると思うのだが、ふと足を運んだ来館者からすれば一フロアーだけの展示と思うかもしれない。展示物の少なさで物足りないと感じる客は居るのではないかと考える。これは祭り船を二日と半日かけて計測して思ったことなのだが。博物館の方々も常に考えていることとは思いますが、展示の方法や空間の作り方は実に難しく、建築を専攻する私にとってもそれを考えていくことは大きな課題の一つだと思う。

企画展

「雲の画家－山本瑛幾遺作展－」

大磯町郷土資料館では、平成６年５月５日（祝・臨時開館）から６月12日（日）まで「雲の画家～山本瑛幾遺作展～」を開催します。

山本瑛幾（本名、一夫）氏は、大正６年（1917）に品川町（現東京都品川区）に生まれました。結城素明、川崎小虎に師事し、昭和16年に東京美術学校（現東京芸大）日本画科を優等で卒業後、本格的な創作活動に入りました。大磯へは戦後まもなく居を構えましたがこの間、在野の美術展に数多く出品し入賞を果たしたり、さらに大日本美術院展の審査員を歴任するなど、応召の期間を含め意欲的な活動を展開しました。しかし、昭和25年に亜幽夢美術研究会を創立主宰するようになってからは、会派にとらわれない自由な発表の場を求め、次第に個展中心の活動へと移行していきました。

同氏は、付立（つけたて）あるいは没骨法（ぼっこつほう）と呼ばれる伝統的な技法に、独自の工夫を加えて描いています。また、身近な自然をモチーフとした風景画や花木画が中心で、特にその時々によって千変万化する雲は、瞬間の美を最も身近に感じさせるものとして格好の対象となりました。また、晩年は、住み慣れた大磯をはじめ、相模湾沿岸地域や伊豆箱根方面の風景を好んで手がけており、その作品は膨大な数にのぼります。まさに生涯を通して身近な自然に美を求め続けた証しと言えるでしょう。

同氏の没後、ご家族のご厚意により、190点もの作品が当館へ寄贈されました。今回の展示は、寄贈された作品を中心に60余点と、愛用の道具や自作の陶器などを２期に分けて公開するものです。ぜひご覧ください。

本企画展の開催にあたり、多大なお力添えをくださいましたご遺族をはじめ、ご所蔵家の皆様、関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

（Ⅰ）平成６年５月５日（木）－５月22日（日）
（Ⅱ）　　５月24日（火）－６月12日（日）

早春　1954年

羊雲　1985－88年頃

公共建築賞関東地区優秀賞受賞

第４回「公共建築賞」において、大磯町郷土資料館は関東地区優秀賞を受賞しました。

この賞は優れた公共建築に与えらえるもので、関東地区34件の中から選ばれたものです。関東地区優秀賞には、郷土資料館のほか、川越市立博物館、東京都葛西臨海水族園、東京都体育館、幕張メッセが選ばれ、同賞を受賞しています。

大磯町郷土資料館受賞の理由には、県立大磯城山公園に対する建物の配置の適切さがすぐれていること、外観のデザインが周りの自然と調和がとれていること、郷土資料館があることで周りの環境が生かされていることなどが取り上げられました。

なお、表彰式は、平成５年12月15日（水）、都内の番町グリーンパレスで行われ、事業者である大磯町、設計者である株式会社坂倉建設事務所、施工者である西松建設株式会社がそれぞれ表彰を受けました。

海と山と人と　①

ジンチョウゲ科　*Thymelaeaceae*

ジンチョウゲ　*Daphne odora*

県立大磯城山公園展望台手前に咲いているジンチョウゲは、早春に外面が紫紅色または白色の小さな花をたくさんつけます。例年ですと、２月の後半から花をつけ始めますが、今年は、２月の雪の影響で一週間から10日開花の時期が遅れたようです。

この花は、今では多くの家庭の庭先で見ることができますが、本来は、中国原産の常緑低木で日本に伝来して来たのは、群書類従巻第百四十一　尺素往来(1534年)に沈丁花として出ていることから室町時代ではないかといわれています。（尺素往来には、ジンチョウゲは春の花として牡丹や八重桜と一緒にとりあげられています。）

ジンチョウゲは、花の美しさというよりはむしろその香りが印象強く、香りによって春の到来を感じさせます。室町時代の人もジンチョウゲの香りによって春の到来を感じていたのかもしれません。

引用・参考文献

北村四郎・村田源（1971）：原色日本植物図鑑・本木編(Ⅰ). 219-221, 保育社

――――――（1932）：群書類従・第九輯. 503-521, 続群書類従完成会

（当館　北水　慶一）

【表紙写真】

キイロスズメバチの巣と巣の内部構造

このスズメバチの巣は、最近、市街地や住宅地で発生して問題となっている種の巣です。巣の内部を見ると、きれいな六角形をした穴の集団が階層状に並んでいます。この内部の様子からハチの高度な社会性をうかがうことがですます。加藤康三氏寄贈。

【トピックス】

◇郷土史講座『相模人形芝居・足柄座』

平成５年度の郷土史講座は、去る３月５日（土）に神奈川県下で伝えられている相模人形芝居（五座）のうち、南足柄市の足柄座を招いて解説と実演をしていただきました（写真右）。当日の演目は、明和５（1768）年６月に大阪竹本座で初演された「傾城阿波之鳴門－巡礼唄之段－」でした。これは、近松門左衛門の「夕霧阿波鳴渡」を近松半二ら５人が翻案し、これに阿波徳島の城主三木家のお家騒動をおり込んだものです。主家への忠義のために故郷の阿波に娘を残し大阪へ出た十郎兵衛の妻が、巡礼姿の娘と再会するという内容で、座員の方々のすばらしい演技に参観者の涙を誘う場面もみられました。

足柄座の人形芝居は、江戸中期の享保年間に、酒匂川の洪水により足止めされた阿波の人形遣いが、地元の班目（まだらめ）の人々に伝えたことに始まるとされており、班目人形芝居とも呼ばれました。戦後しばらく途絶えていたようですが、昭和40年頃から婦人会有志により復興され、近年では後継者も増えて活動も盛んになりました。現在、座員は南足柄市郷土資料館において定期的に練習に励んでおり、人形の首も同館で保管しているそうです。

今後も、このような機会を設けていきたいと思います。

【資料の受入】

（寄　贈）ご協力ありがとうございました。

高　麗	片野　直三氏	トウミ他
高　麗	星野　善三氏	翡翠石
大　磯	飯田　福信氏	漁具他
大　磯	田中　　孝氏	大磯石
大　磯	加藤　康三氏	スズメバチの巣
大　磯	木村　純子氏	衣服他
西小磯	倉知　冨貴氏	古文書他
虫　窪	二宮喜徳郎氏	ヤバサミ
国府新宿	加藤　英雄氏	古式土師器
平塚市	加藤　春雄氏	ハサミバコ他

（移　管）

総務部総務課	豆彩瑞果文輪花鉢
図書館	高橋誠一郎資料他

（購　入）

絵はがき

【行事案内】

みなさんの参加をお待ちしています。詳しくは町広報をご覧になるか、館へ直接お問い合わせください。

▼企画展

『雲の画家－山本瑛幾遺作展－』

５月５日（木・祝）～６月12日（日）

Report　－大磯町郷土資料館だより－No. 9
平成６年３月31日
編集発行　大磯町郷土資料館
〒255 神奈川県中郡大磯町西小磯446-1
ＴＥＬ 0463(61)４７００
ＦＡＸ 0463(61)４６６０